

イエス、良い羊飼。イエスが小羊を肩に乗せたり腕に抱いている光景は、私たちの心へのどかな姿として浮かびあがる。イエスの時代の現実には、羊飼いの仕事はのどかなものではなかった。今週の福音書（ヨハネ10:11-18）にあるのだが、特に夜は危険であった。

“良い羊飼イエス”と言うのは、羊を大切にされるイエスのことだ。

よい羊飼いは、羊の群れ、従う者のためにすべてをなされる。

イエスがそうされるの、従う者が大切であり、神から権威を与えられているからだ。

この権威とはなにを意味するのか？ イエスが私たちのためになされたこと、罪なき者を人類のために死ぬ準備をされたのは、今後、神以外の誰もなすことがないだろう。

初めに、神が世界を創造され、すべてを良しとされた。神は人類を造られ、良しとされた。私たちも知っているが、創世記のなかに“禁断の実”の記述がある。それは食べてはいけないと神から言われていたのに、アダムとイブが食べた物語である。

二人が果実を食べる以前は、神とは良好な関係があり、神との真実な愛の交わりがあった。彼らは裸でいることの恥ずかしさ感じなかった。貧欲さ、罪も存在しなかった。

本質において、彼らはイエスのようであった。人間として彼らは、神が造られた園のよき管理人になろうとしていた。そこは神と自然が調和して暮らせるところである。

二人に必要なすべてが与えられていた。それは喜びに満ちた日々であった。

人間が果実を食べた瞬間から、“墮落した”と常に言われている。

人類は神の恵みから見捨てられた。私たちは良好な関係から見捨てられた。

そこには神との調和と服従を持って生きる自由があった。

“服従の自由”とは、イエスが歩まれた道であった。

聖書からイエスが葛藤された日々を知ることができる。

イエスは死の前夜、恐れていた。ゲッセマネの園（エルサレムの東方、オリーブ山の麓^{ふもと}）で祈られた時であった。死に面して恐れない者はいるだろうか？

イエスとその夜に感じられたのは、どんな恐れであったか少し考えてみよう。

イエスに一瞬の迷いがあったのは間違いなのであろう。

イエスがなされたことを、誰かがなすことができると想像できるだろうか？

無実であるのを知っておりながら、弁護が提供されない人を知っているだろうか？

間違った有罪判決を受け、死に面しても戦わない人を知っているだろうか？

答えは“誰もいない”である。よい羊飼いが私たちになされたことは誰にもできない。
雇い人が常に**ひと**に関心があるのは、つまり自分自身のことであり、それを神はご存じである。

2019年4月5月にカミノ・デ・サンティアゴを歩いていた。それはフランスからスペインに至る有名な巡礼街道である。イエスの兄弟である聖ヤコブの遺骨が置かれた遺跡がある。私はダウンタウンのSt. Jamesに3年間所属していた。そこは私の居場所であった。

しかしそこは神が私を求められている所だと確信していなかった。

800kmの街道を5週間かけて歩む内に、私に前へ進みなさいと神が求めておられるのが、少しずつ感じ始めた。私は祈り続けた。司祭職の教区募集広告が私に語りかけたのだが、教区ウェブサイトの教会紹介を調べてのだが、この職は積極的に宣伝されておらず、「私は求められていない、私は日本語が話せない」と自分自信に言い聞かせた。しかし神の働きかけの感触が、圧力が、引力が、消えなかった。

私はFr. Douglasと話して申込用紙を記入した。聖十字教会が私の居所だと分かったのだ。イエスはその真っ直中におられ、私と牧師選考委員会の人々を導かれた。あなたがたは直ちに私を身近にさせて下さり、聖十字教会の働きを教えて下さった。そしてあなた方の信仰と伝統を共有させて下さった。

2020年の2月、コロナウイルスが人々に影響するのは、私たちは遠い先のことだと思っていたと思う。私たちの誰もが感染しておらず、感染で亡くなった人を誰も知らなかった。

今はその違いが分かる。それとともに時折、私は神に語っている。どうしてこの事が起きているのか？ どうして私たちは共に集まり、あなたに礼拝を捧げる事が許されないのか？ 神は夏に数週間の（集会禁止令の）休止を与えて下さった。聖十字教会の未来について笑いを伴いながらも深い議論があり、聖餐式を執り行ない、食卓で交わりを得た。神は聖書勉強会に、日本の朝、5時から参加する人々を与えて下さった。なぜならこの教会の、ここに聖霊の働きがあるからだ。

神は私たちに献身と変革する意志を与えて下さった。その意志は私たちみんなの中で働いている。良い羊飼いは決して私たちを見捨てられなかった。神は新しい人々を私たちの所へ連れてきて下さった。そして彼らの才能を通して教会をより近くにさせて下さった。財政的に困難な状況であるのを知った。私たちが同意した解決策自身が物語っている。

本日の福音書の物語は、決して雇い人**ひと**のことではない。

イエスは雇い人を、単にご自身を指し示すために用いられている。そして言われた。

『わたしは良い羊飼いです。私は命を捨て、再びあなたがたのために命を受ける』。

良い羊飼いは命を捨てた。そして再びバンクーバーの聖十字教会のために命を受けられた。
良い羊飼いは、この主の群れと共に内陸の収容所へ旅をされた。

日系カナダ人は、信仰と耐え忍ぶことによって、再びバンクーバーの地に帰ってきた。
聖ペテロ霊園の記念額に刻まれているこれらの名前の人々も、同じ道に導かれた。
数々の苦難を乗り越えた。多くの年数、飢餓の年数を乗り越えて、
羊飼いはどのように導くのだろう？

主教が教会礼拝に入場する際に、司教杖^{じょう}という素晴らしい名前がついた羊飼いの曲がった杖を持ってくる。それは長い杖で、先端の金輪の半分が曲がっている。
その半曲がりには、羊飼いが羊を傷つけないように首の回りを捉えるためにある。
もう一方の端（下端）には、かつては重いボールがついていた。
それは羊の行く方向を変えるために使われ、羊の頭を確実に叩くためであった。

羊飼いは羊を叩く？ 必要な時だけである。時に羊は、何かよくないことのある間違っただけの方向に突き進むことがあり、羊飼いは羊を道に戻すために、頭を叩く必要があるのだ。
虐待ではなく、訓練ではなく、羊に有益なかじ取りである。羊はなぜこうされるのかをほぼ分かっていない。このような知識は羊ではなく、羊飼いのためだけにあるからだ。

この過去1年間、多くの私たちが頭を少し叩かれたような気がしたのである。
私たちは絶えず方向の変更を告げられてきた、頭にピッシャリ！
コロナ感染の上昇、頭にピッシャリ！ 礼拝はオンラインになった。
コロナ感染が改善した、頭にピッシャリ！ 私たちは教会に戻る事ができる。
頭にピッシャリ！ ジェットコースターに乗っているような感じだった。

振り返ると、イエスによって私たちは導かれ、群れを率いて下さってことに深く感謝を捧げている。あなたのように私も一匹の羊であり、あなたがたと共に歩めたことは恩典であった。司祭はやって来て、そして去るのは常である。
司祭は良い羊飼いがなされたことを、決して誰にもなすことはできない。
なぜなら司祭たちもあなた方と共に導かれ、救われているからだ。
新司祭をこの群れに、あなた方が私に下さった同じ愛と歓待の心で受け入れてほしい。
司祭たちが宣教において、この教会で私が受けている楽しさを得ることを祈っている。

聖十字教会は決して道を失うことはない。期待できることがたくさんある。
主に栄光があるように。次にどんなことが起きても、恐れなくてほしい。アーメン。

(文責長澤猛)